

学会だより

第 97 回 日本消化器内視鏡学会総会

太田 和寛 竹内 利寿
樋口 和秀

(大阪医科大学第 2 内科)

1. 学会概要

第 97 回日本消化器内視鏡学会総会は、令和元年 5 月 31 日から 6 月 2 日に、グランドプリンスホテル新高輪および国際会館パミール(東京都港区)にて開催された。昭和大学江東豊洲病院消化器センター教授の井上晴洋会長は、スローガンを「本質を視る」“Endoscopy: A keen insight into nature of a disease”と掲げられ、“内視鏡を通して、病気の本質を見抜き、それに基づいて、患者さまへ低侵襲かつ効果の高い治療を提供する”ことをテーマとして各プログラムが考案されていた。

規模の大きな会場であったにもかかわらず参加者で会場が溢れており、満員御礼で立ち見のセッションも少なくなかったように思う。特筆すべきは、国際的なセッションが豊富であり、今後の日本消化器内視鏡学会の進むべき方向性が明確にされたように感じられた点である。発表者は最新の内視鏡技術や新知見を競うように講演し、最新鋭のエアコンが設置されているはずの会場内は内視鏡医の熱気で満ち溢れていた。

2. JGES Core Session 1「GERD 診療の今後の展開」

JGES Core Session は読んで字のごとく、日本消化器内視鏡学会の核を担うセッションであり、今回上部消化管領域では胃食道逆流症に関する話題が募集された。1 演題あたりの発表時間が 12 分もある、少数精鋭の 7 演題が発表された。GERD 診療において内視鏡は必要不可欠であり、粘膜傷害重症度の臨床的意味合い、食道運動機能検査、全身疾患と GERD の関係、難治性 GERD に対する内視鏡治療などについて、か

なり深く熱い討論が繰り広げられた。粘膜傷害の有無と重症度だけを見ている Los Angeles 分類だけにとらわれることなく、粘膜傷害の時相も臨床的な意味合いのある可能性が考えられた。今後は、超拡大内視鏡などを駆使した、GERD の本質を視るための研究が必要となってくるであろう。最後に、当科(大阪医科大学第 2 内科)の樋口和秀教授が特別発言で Session を締めくくった。

3. 高齢者における内視鏡診療

Core Session だけでなく、主題セッション、一般演題セッション、ポスターセッションでも消化管・胆膵領域の最新の知見が発表された。そのなかでも重要な今後の臨床課題は、高齢者における内視鏡診療である。高齢者は非高齢者と処置内容は変わらずとも、偶発症が重篤になりやすい傾向が明らかとなり、その予測因子は術前に明らかにできる可能性が報告された。そのため、高齢者への内視鏡処置前に、全身状態を考慮した適応の判断と周術期管理が重要であると考えられる。

4. そして 2020 年へ

今回の日本消化器内視鏡学会総会の単独開催は、2020 年 5 月 22~24 日に京都で行われる第 99 回総会である。会長の樋口和秀は、「一 Dream & Pride—世界に発信する日本の内視鏡」をテーマに、幅広い演題を検討している。先人が築き上げたものを、さらに発展させ、世界に誇れる内視鏡診療を再認識していくという姿勢は、内視鏡診療だけでなく日本医療の発展に必要な不可欠であると私たちは思う。